

創立記念講演会要旨

国際理解と国際比較

統計数理研究所 林

知己夫

(昭和60年10月26日, 統計数理研究所 講堂)

国際理解はこのごろの流行語である。一見解ったようで、突き詰めて行くと解らないことだらけである。これに似た言葉に「世論」「公害」「自然保護」等がある。うたい文句としての意味は大きい。が、実質的にはなかなか実を結ばせるにはこれからの道程が長い。まず理解とは何か。自分の「論理」で理由付け出来ることを意味するが、これが必ずしも普遍的とは言えないことも多い。普遍的理解でない理解は「国際理解」の問題では国際相互不理解に繋って行く。「国際理解」は国際相互理解であるべきであり、そのためには相互に理解できる論理、つまり科学的論理に基く科学的方法による理解しかあり得ない。これは言うは易く、行うには難しい。何が科学的論理と言うべきものか。

幅広いデータに基かない、主観的な論理—当人は普遍的と信じているが必ずしも一般に普遍的でない論理—によるとき不知不識のうちに「自分なり」の論理でものを考え、しかもそれが恰も普遍的論理と思いつ込んでいてという事態が生ずる。よくある半可通の議論、「かぶれ」の議論、「思い過し」の議論になる。

嘗ては、外国理解だけでなく、たとえそれが誤解であっても、外国に学び追い付くことに主眼があったのであるから、それに寄与する限り意味はあった。「正しい理解」「誤解」だの議論はあっても「コップの中の嵐」であり、それが日本の向上に資するのであれば有用であったのである。しかし、今日では違う。相互理解でなくてはならない。独り相撲でなく相互に努めるべき問題である。このために相互の心構えと努力が必要である。この動機を与えるものとしては芸術・文化・スポーツなどの交流は必要であるし、経済・産業の成果や国際政治での活動も重要である。この動機によって意欲が起ったとき、いかに対処するかが問題である。いかにして相互理解するか、理解させるかである。どのような材料、どのような方法であろうか。私は、科学的方法、人間の科学的研究の一環としての意識の国際比較研究が不可欠のものと思っている。このごろ「日本学」というものが提唱されているが、日本のことを日本の論理で理解させるのであれば一握りの「ジャパノロジスト」を満足させるに過ぎない。私は「日本学」が前述の「人間の科学的研究」の一つとして、そのための普遍的方法を開発しそれに基く研究を志向しない限り期待できないものと思っている。

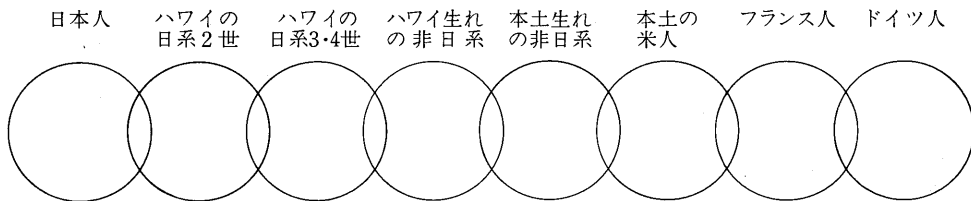
ここで言う意識の国際比較ではどう言う科学的方法が考えられるか。少くとも、一つの仮説を検証しようとする研究態度は望ましいものではない。「測定する道具」が適切かどうかも明確ではない。「道具」の持つ意味が、一義的かつ明確ということはある得ない。「ある限られたなかでこうであろう」という程度の「道具」なのである。この条件の上に立って測り、データを分析し考え直し、「道具」の意味を考え直し、さらにそれを新たにして測り、データを解析し、結果がどう異なってきたか、あるいは、変化はないかを様々の方向から分析し直し、ここでまた考えを進め……という工合に常に原点に立ち戻りつつ「道具」の性格を明らかにしつつ調査分析を繰返し情報を取り出して行くと言う探索的方法が望ましいものである。上昇螺旋的に原

点へ戻りつつ高まるという研究方法が重要なものである。この学習の情報獲得の過程が、国際比較方法のあり方であると考えている。

例えば「道具」を質問文としてこの行き方を説明してみよう。質問文はそれぞれ性格を持っている。諸調査の中で用い、他の質問との連関の中にそれを位置付ける。また同一質問群の中の長期間の継続調査を通してその質問文の性格を調べる。また国際比較調査を行ってその質問文の持つ機能一人間の考え方感じ方を調べるための一を明らかにすることが重要である。このため、他の質問群と共に、分析のための種々の質問群を構成し、その関連性を解きほぐす、質問群の構成の差異によって、その質問が関連性においてどのような動きを示すかを掴むことが大事なことになる。このような分析を通して明らかにされた内的履歴書、生活歴が質問文の性格となる。こうしたパーソナリティを持つ質問群を用いて、意識を探るということになるのである。

質問文と調査対象との関係において生ずる特色もある。いわゆる中間回答—いずれかへ明確に割り切ることを嫌う態度—に対する日本人の好みというようなもの、アメリカ人の極端な表現の好みなどの問題もある。こうしたことを踏えての分析も重要な問題である（これらの問題及び以下の議論の詳細）に関しては、林：調査の科学、講談社、1984、林・鈴木達三：社会調査と数量化—国際比較調査を素材として—、岩波書店、1986を参照されたい。

比較方法論の問題に移ろう。全く相異なるものの比較はただ異なるというだけでそれ以上の手掛りを得ることは不可能である。まず取り上げる対象から考えてみよう。日本から考えて東廻りで行くと次のような図式となり、我々はこれで研究を進めている。互に似ており異るところが予想されるものを繋げると第1図の通りになる。



第1図

このような考え方で漸次その拡大を考えているのである。

一方西廻りの方では学生調査を中心（一部一般の人）にしか出来上がっていないが、次のような形で東南アジアとの比較を行っている。

それは、

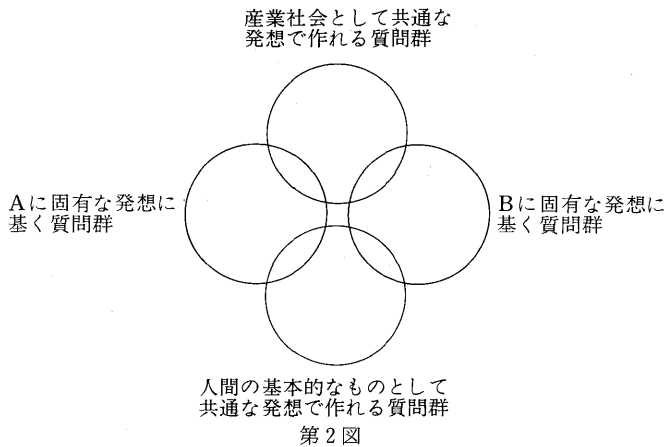
日本、フィリピン、シンガポール、タイ、マレーシア、インドネシア

という繋がり方である。この繋がり方も次第に拡大し、間隙を埋めることにしたいわけであるが、比較可能な意味での調査実施という観点からみると、甚だ困難な問題を含んでいる。現実的に可能な形で進めるよりほかに道はないと思っている。

我々の鎖は一応上述の通りであるが、必ずしもすべての面で出来ているわけではなく、我々の考えている意味において比較可能なデータは部分的にしか存在していない。そのうち日本→ハワイ→アメリカは、組織的に分析され、これにフランスを加え上記の文献「社会調査と数量化」に詳しい。日本、フランス、ドイツについては自然観に関する調査があるがこれについては、森林をみる心、共立出版1984、また、日本、フィリピン、日本の対外国態度、至誠堂1977、日本、シンガポール、インドネシア、マレーシア、タイについては工学部の学生調査であるが、

日本と東南アジアの文化摩擦，出光書店 1982，日本人研究三十年，至誠堂 1981 に発表されている。

以上は対象たる国についての考え方であるが，質問についても同じである。互に似ているところを測る質問群，異なる（固有の発想による）ところを測る質問群を用いるのである。相互に共通な発想（アイディア）で作らうる質問群とそれぞれに固有な発想（アイディア）に基づく質問群をつくると A，B 両対象が共通質問群を媒介としてすべての質問の関連する姿をそれぞれ理解しうることになる。さらにこれらを時系列的に継続させデータを連繫させることにより変化に対するより一層充実した情報を獲得することが出来るようになる。



以上のような考え方を連鎖的比較研究方法と名付けているのである。

こうした連鎖方式により得られたデータを分析することになるが，全体の意見分布の比較，属性別にどう異なるかの比較も大切であるがさらに重要なのは意識の構造の問題である。これは質問間の関連性を調べることによって可能となるがこうした関連性を目に見えて解らせる方法として，パタン分類の数量化(数量化 III 類)が中心的方法として有力なものとなる。その他，種々の多次元的データ分析の方法が用いられることになる。これらについても前記「社会調査と数量化」に詳しい。

一般的な議論は一応ここで打ち切り，日本，フランス，ハワイに関して行った国際比較方法と相互理解のあり方の一端を示してみよう。この場合は，高度産業社会に共通する質問のみしかデータが得られなかったことと，一時点のデータしかないことの制約はあるが，この種の質問に関する限り，連鎖的なつながりがあると一応認めてもよいであろう。しかし，これだけで結論付けるのは誤りであって，それぞれ固有の発想の質問を加えることによって比較の核心に触れることになる。これについては目下研究を進める積りでいる。

まず，我々のとりあげた質問群を第3図に示そう。

これらの質問をすべて含めて，考えの筋道を見出すためパタン分類の数量化を用いてみた。その結果，質問群が，ほぼ独立な群（大文字群の質問群），（小文字群の質問群）すなわち不安に関する質問群とそれ以外の質問群に分れることを知った。

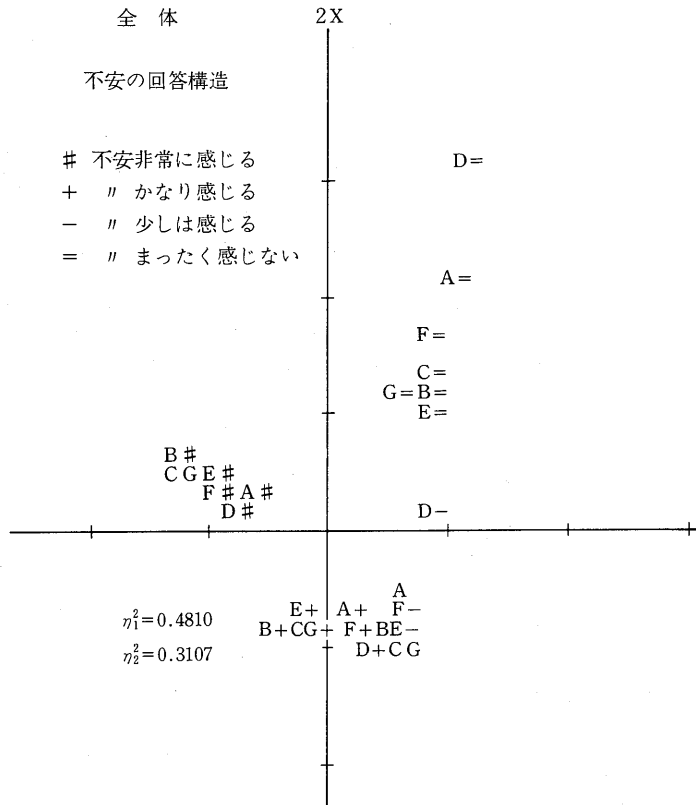
そこで，2質問群を別々に分析することにした。まず不安の質問を日本，ハワイ，フランスの3群別に分析してみたところ全く同じ構造であったのでそれらをあわせて分析したところ明らかなガットマンスケールの構造をしていることがわかった。（第4図）

これを各グループ別に平均値を目盛ってみるとホノルル全体（不安あり），フランス全体（不

{ A 家庭はくつろげる唯一の場 B 離婚 D 家事	}	△ 伝統的	・ 中間	▲ 近代的
		{ E 生活環境 Z 騒音		
		○ 満足		● 不満足
{ L 生活状態 M 国全体の生活状態 N 今後の生活状態	}	○ 良くなった (なる)	・ 中間	● 悪くなった (なる)
		{ W 科学と日常生活 R 情報化社会		
		□ 役に立つ (望ましい)	・ 中間	■ 役に立たない (望ましくない)
{ Y エネルギー節約 F 環境保護	}	□ 非常に重要	・ 中間	■ 重要でない
		{ G 健康状態 H コネによる病気治療		
		○ 満足 (賛成)	・ 中間	● 不満 (反対)
a 不安 重い病気	}	# 非常に感じる + かなり感じる - 少しは感じる = 全く感じない		
b " 仕事上の事故				
c " 街での暴力				
d " 交通事故				
e " 失業				
f " 戦争				
g " 原子力施設事故				

注) アルファベットは質問; 右側はカテゴリーの記号である。

第3図

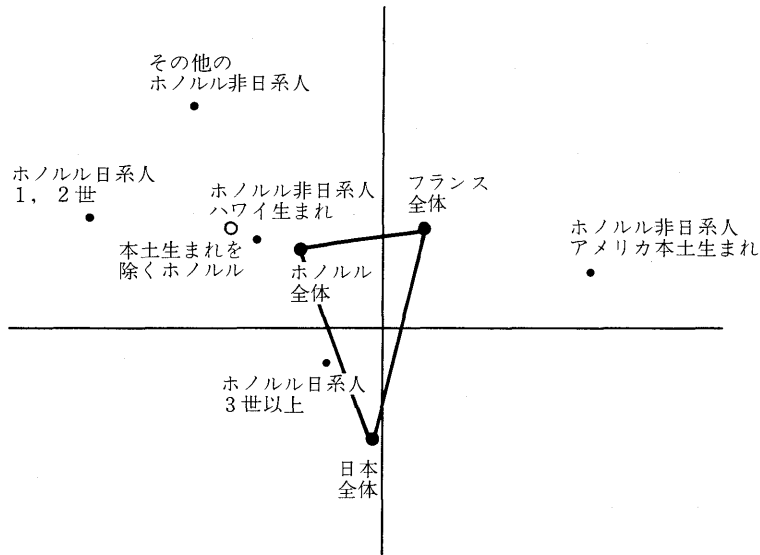


第4図

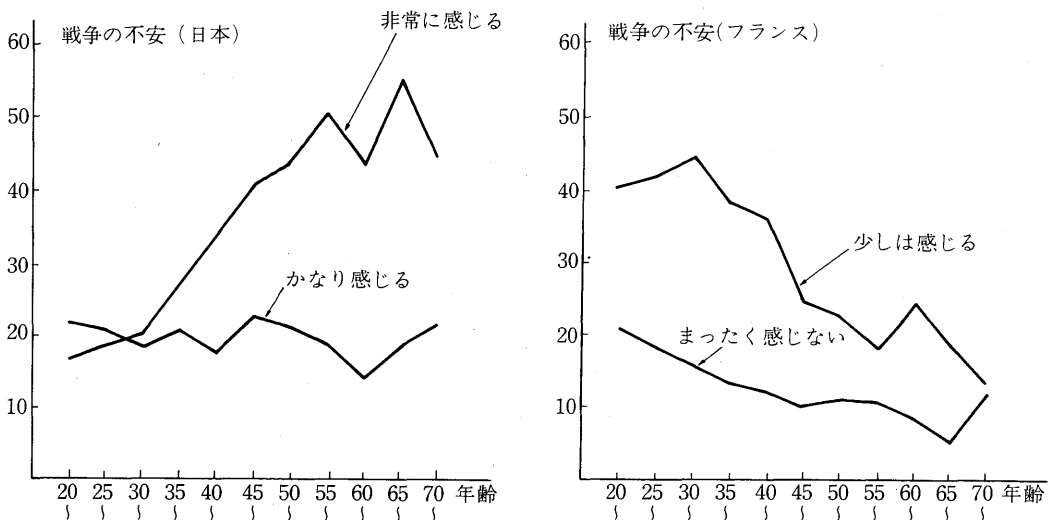
安なし)日本(中間)という三極構造が見られる。ホノルルを細分するとアメリカ本土生れのホノルル非日系(白人と考えてよい)とフランスとは不安のない方、ホノルル日系(1, 2世)その他の非日系ホノルルは不安のある方、3世以上のホノルル日系人は中間が多いという形が出ていて面白い。この状況は第5図に示す。

ここで「不安を感じるか」の質問の中で、戦争に対する不安をとりあげ日本、フランス別に年齢別に集計した結果を第6図に示してみよう。

日本では「非常に感じる」は、高年齢ほど多く若い方に少ないという際立った様子が見られる。フランスでもややその傾向が見られそうであるが、あまり差がないというのが面白い。戦争体験と戦争のうけとめ方が異っているためであろうか。



第5図



第6図

質問の カテゴリー	JA	HH	HM	T	KS	FR	PR	
A△	4	5	7	1	1	3	6	
B▲	7	6	4	4	4	2	1	
D▲	4	5	1	7	6	3	2	JA ホノルル日系人
E○	1	1	3	7	6	4	5	HH ホノルル非日系人 ハワイ生まれ
Z●	7	6	2	3	5	4	1	HM ホノルル非日系人 アメリカ本土生まれ
Y□	2	3	1	6	7	4	4	T 東京
F□	5	4	2	7	6	2	2	KS 日本全国
G○	2	3	1	6	7	5	4	FR フランス全国
H○	5	6	7	4	3	2	1	PR パリ
L○	1	2	3	5	4	6	7	
M○	1	2	4	5	3	6	7	
N○	2	2	1	4	5	6	6	
W□	3	2	1	7	4	6	5	
R□	4	3	2	7	6	5	1	
a	2	3	7	4	5	1	5	
b	2	3	7	4	1	4	6	
c	1	2	3	5	4	6	6	
d	2	4	7	3	1	5	6	
e	1	3	6	7	5	2	4	
f	2	1	3	7	4	4	6	
g	1	2	3	5	4	6	7	

第7図

つぎに、それ以外の方面の質問をとりあげこの周辺分布を総合したときどうなるかをみよう。まずある質問のカテゴリーで、どのグループの支持比率が一番多いか少ないかの順位をつけてみたのが第7図である。1が一番多いことを示す。

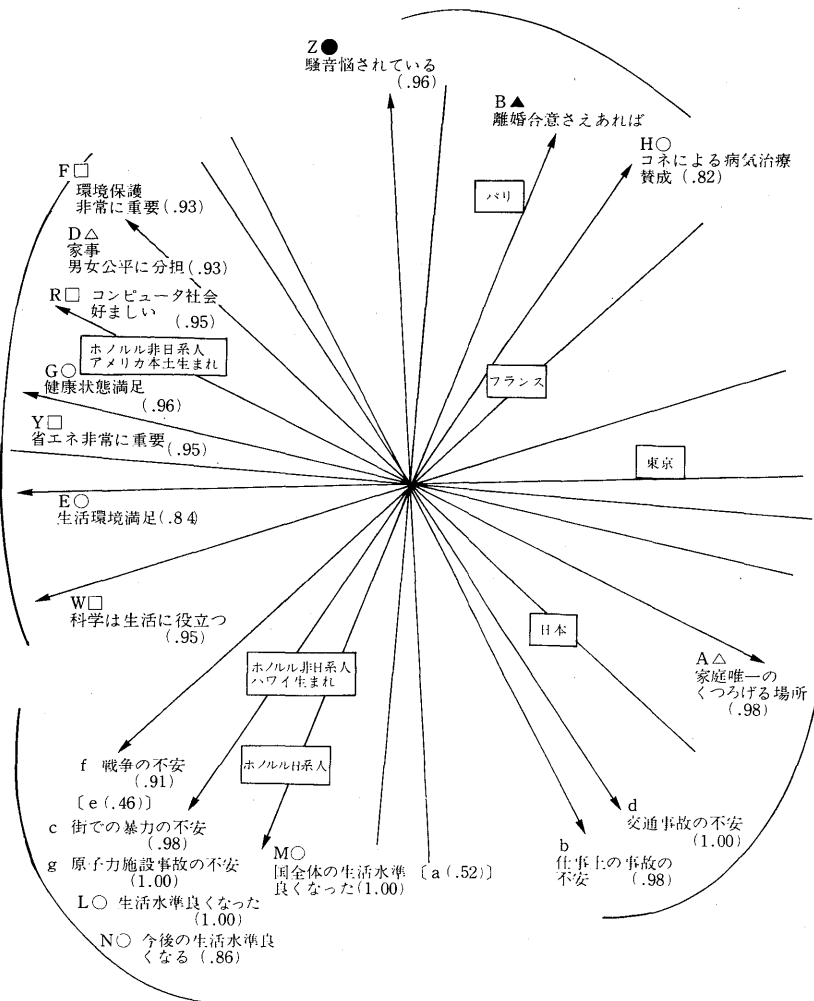
これについて APM の方法 (C. Hayashi: Some Statistical Methods in Market Survey, Bulletin of the ISI, Proceedings of the 42nd Session, Book 3, Vol. 48 参照) で図示したのが第8図である。日本、フランス、ホノルル日系、ホノルル本土生れが特色あるグループとなっている。それらがどの回答カテゴリーにおいて多い回答比率を示しているかという観点から質問カテゴリーのクラスター化が行われ、これは括弧でくくってある。この APM の方法によりグループと質問カテゴリーとが特色に応じて同時分類されている。ここでも三極構造が現れているのが解る。

つぎにこれらの質問群を用いてその中の考えの筋道を明らかにするため、パタン分類の数量化を行ってみた。まず、日本、ハワイ、フランス別に行ってみたが夫々特色ある構造が出ているが、大局的にみると同じ筋が出ている。特色ある構造については、別の機会に譲るとしてここでは、大局的な構造によるグループの位置付けを考えてみることにしよう。すべてのデータをまぜ合せパタン分類の結果を示すと第9図のようになる。

特色あるクラスターが I, II, III と出てくるがその特色は第1表に示す通りである。

きわめて明快な特色が示されていることがわかる。全体的に等質な考えの構造の中において、国によって特色が出ているのがはっきりわかる。

こんどは、第9図の数値を用いグループの平均値を目盛ってみると第10図のようになり、3極構造がここでははっきり見られ、ホノルルの各群は一団となって固まり、日本とフランスと離れて存在する姿は、やはりアメリカの一特色が見られるわけで、この三群の示す強い特色は第1表に示したものと合っている。

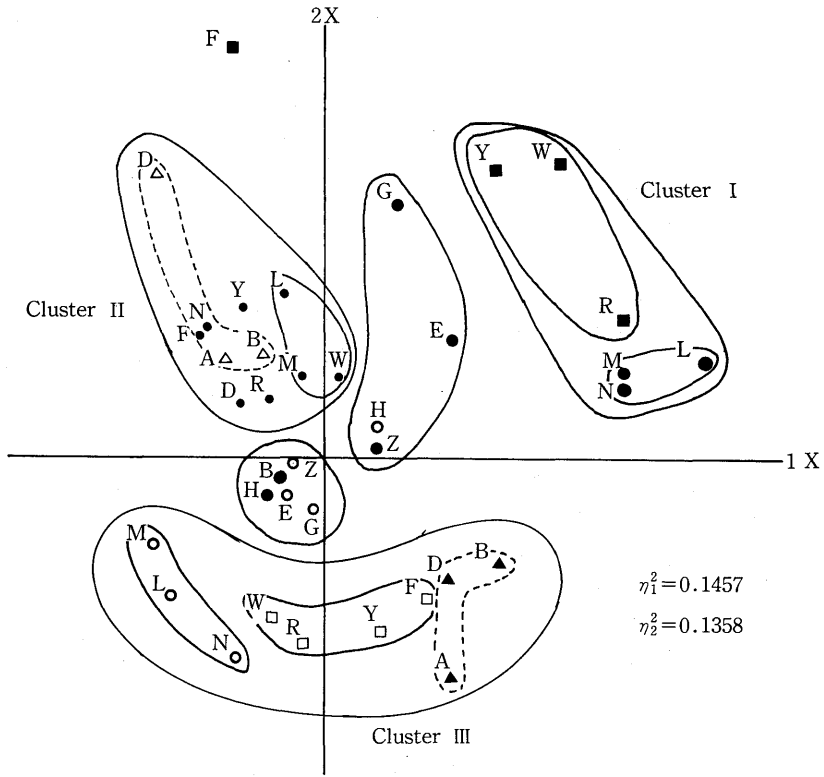


第 8 図

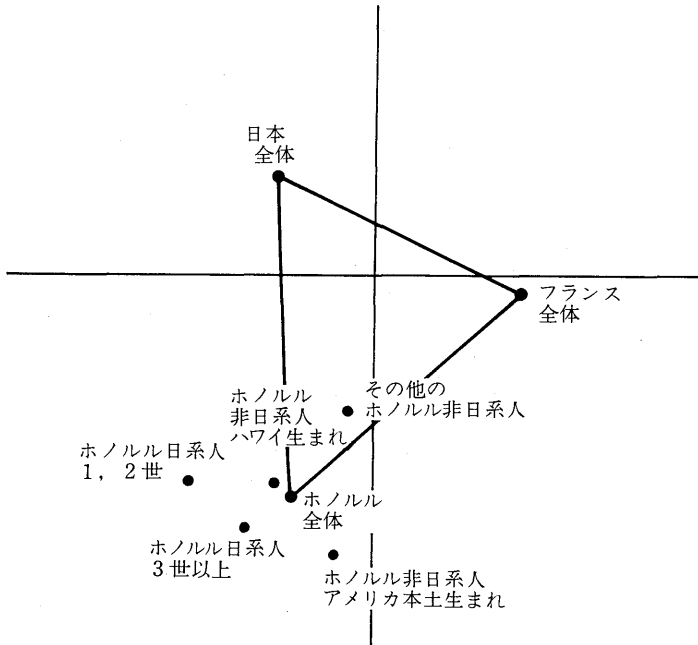
第 1 表

クラスター	内 容	国
I	生活経済状態，科学技術にネガティブな態度	フランス
II	家庭に伝統的態度，種々の質問で中間回答を示す態度	日 本
III	生活経済状態，環境保護，科学技術に肯定的，楽観的態度，家庭への近代的態度	ホノルル

このような三極構造は夫々の群で何等かのところで似たところがあり，何等かのところで異なるところがあることを示しているのであって三国比較の情報の多いことが如実に示されてきたわけである。日本（東洋）対アメリカ・フランス（西洋）の図式ではなく夫々の相互関係において類似点，差異点を互に理解しあえる論理で具体的にこのようにして考えることが国際理解推進のために重要な意味を持つものと考えるのである。



第9図



第10図